

落語家・露の新治さん「お笑い人権高座」にいたる道のりを語る

落語と狭山事件が変えた私の人生

(終)

第70回文化庁芸術祭賞大衆芸能部門優秀賞と奈良人権文化財団の第6回奈良人権文化選奨を昨年、受賞した落語家・露の新治さん。落語家、そして「お笑い人権高座」にいたる道のりを語る。3回連載の最終回。

落語で生きると決めて

実は24歳の12月、大学卒業前に林家染三師匠に弟子入りしながら、落語家になる踏ん切りがつかなかった。水商売や芸人はまともな仕事でないという考えが吹っ切れず、親に申し訳ない気持ちがあったのが大きい。ためらいがあったときに夜間中学の運動にのめり込み、修業のことを忘れていた。ところが、公立夜中が開校して自分が要らなくなり、どうしようかと。同世代はもう18ぐらいから

修行を始めてから、10年近く出遅れている。夜中の生徒さんには「やりたいうこと、やらなアカンことを一所懸命やりましよう」「ぼやく暇に文字一つ覚えましよう」とエラそうに言っていた。なのに、自分分は「もう年齢やから…」とためらう。そんなとき、ある生徒さんに「いまのあなたは、いまがいちばんある生徒さん」「いまの貧しい庶民が活躍する落語がたくさんある。客席に泣きたい気持ちをごらえて座っている人をも、楽しかった」と元気づける効果があると思います。

落語の世界

落語の世界は大半が庶民の暮らし。貧しさが基本です。「大きな声出すな、腹減るやないか」という台詞が平気で出てくる。そんな貧しい庶民が活躍する落語がたくさんある。客席に泣きたい気持ちをごらえて座っている人をも、楽しかった」と元気づける効果があると思います。

「お笑い人権高座」へ

人権パネル展を毎年していた大阪の大東市で30年ほど前、「いじめ」をテーマにパネル展と新作落語を、と私に依頼が来た。四苦八苦して「いじめ入門」の落語にまとめた。テレビで報道されたりして急に依頼が増えた。落語だけでは短いのので、いじめの問題を通じて考えたこと、自分が子育てで手を抜いていたことを反省も交えて話し、一席としました。そのうち「いじめ入門」をつくる過程で感じたことを1時間ぐらいで話して、と大東市に言われたのが、講演形式の「お

1、2本、西日本放送のレギュラーと、月に10日はロケとかで走り回っていた。落語会もしながら4年ほどそうやって。ただ、このままでは、おしゃべりタレントになってしまうと思った。そんなとき、露の五郎師匠(のち、露の五郎兵衛)に迎えてもらえること

どこまでの覚悟をもって生きてるかが垣間見える。上方演芸界には、とくに

になり、8月にあいさつに。林家さん二の名で9月にNHKの「上方落語会」に出るはずが、いきなり「露の新次(のち、新治)」の名前をもらって「野ざらし」で出ました。落語家になるまでは長かったが、落語家になってからは力量に不相应に順調でした。

入りのしながら、落語家になる踏ん切りがつかなかった。水商売や芸人はまともな仕事でないという考えが吹っ切れず、親に申し訳ない気持ちがあったのが大きい。ためらいがあったときに夜間中学の運動にのめり込み、修業のことを忘れていた。ところが、公立夜中が開校して自分が要らなくなり、どうしようかと。同世代はもう18ぐらいから

修行を始めてから、10年近く出遅れている。夜中の生徒さんには「やりたいうこと、やらなアカンことを一所懸命やりましよう」「ぼやく暇に文字一つ覚えましよう」とエラそうに言っていた。なのに、自分分は「もう年齢やから…」とためらう。そんなとき、ある生徒さんに「いまのあなたは、いまがいちばんある生徒さん」「いまの貧しい庶民が活躍する落語がたくさんある。客席に泣きたい気持ちをごらえて座っている人をも、楽しかった」と元気づける効果があると思います。

人権パネル展を毎年していた大阪の大東市で30年ほど前、「いじめ」をテーマにパネル展と新作落語を、と私に依頼が来た。四苦八苦して「いじめ入門」の落語にまとめた。テレビで報道されたりして急に依頼が増えた。落語だけでは短いのので、いじめの問題を通じて考えたこと、自分が子育てで手を抜いていたことを反省も交えて話し、一席としました。そのうち「いじめ入門」をつくる過程で感じたことを1時間ぐらいで話して、と大東市に言われたのが、講演形式の「お

1、2本、西日本放送のレギュラーと、月に10日はロケとかで走り回っていた。落語会もしながら4年ほどそうやって。ただ、このままでは、おしゃべりタレントになってしまうと思った。そんなとき、露の五郎師匠(のち、露の五郎兵衛)に迎えてもらえること

どこまでの覚悟をもって生きてるかが垣間見える。上方演芸界には、とくに

になり、8月にあいさつに。林家さん二の名で9月にNHKの「上方落語会」に出るはずが、いきなり「露の新次(のち、新治)」の名前をもらって「野ざらし」で出ました。落語家になるまでは長かったが、落語家になってからは力量に不相应に順調でした。



落語家 露の新治さん

ちなんだん自分が出てくる。「芸は人なり」と先代柳家小さん師匠が言わはったように、ネタより誰の囁きを聞くか、となる。落語は味わいの魅力も大きく、年をとるのはマイナスだけではない。その人の人生経験、どう生きたかが芸に出てくる。他人、自分、社会

語にまとめた。テレビで報道されたりして急に依頼が増えた。落語だけでは短いのので、いじめの問題を通じて考えたこと、自分が子育てで手を抜いていたことを反省も交えて話し、一席としました。そのうち「いじめ入門」をつくる過程で感じたことを1時間ぐらいで話して、と大東市に言われたのが、講演形式の「お

1、2本、西日本放送のレギュラーと、月に10日はロケとかで走り回っていた。落語会もしながら4年ほどそうやって。ただ、このままでは、おしゃべりタレントになってしまうと思った。そんなとき、露の五郎師匠(のち、露の五郎兵衛)に迎えてもらえること

どこまでの覚悟をもって生きてるかが垣間見える。上方演芸界には、とくに

になり、8月にあいさつに。林家さん二の名で9月にNHKの「上方落語会」に出るはずが、いきなり「露の新次(のち、新治)」の名前をもらって「野ざらし」で出ました。落語家になるまでは長かったが、落語家になってからは力量に不相应に順調でした。

分、またまた願生りませ。

「お笑い人権高座」で表情豊かに語る露の新治さん(7月23日・奈良市)